

# 第1分科会

(宇城市)

## 過疎地域持続的発展優良事例発表会

コーディネーター

過疎地域持続的発展優良事例表彰委員会 委員長 早稲田大学名誉教授

宮口 侗 勉

過疎地域持続的発展優良事例発表団体

美国・美しい海づくり協議会 余別・海HUGくみたい (北海道積丹町)

資源が循環するまちづくり

ねばむら  
根羽村 (長野県根羽村)

ねばー ギブアップ

ひだ  
飛騨市 (岐阜県飛騨市)

人口減少先進地の挑戦！地域を超えて支えあう「お互いさま」が広がるプロジェクト「ヒダスケ！」

100プロ (広島県北広島町)

地域の児童数を100人に！

くまもと☆農家ハンター (熊本県宇城市)

厄介者を地域の宝に変える！を目指して





## 歓迎挨拶

宇城市長

守田 憲史氏 (もりた けんし)

おはようございます。ようこそ宇城市へおいでいただきました。「全国過疎問題シンポジウム 2022 in くまもと」分科会の開催にあたり開催市を代表し、ひと言、御挨拶を申し上げます。

本日は、御来賓をはじめ、全国各地からお越しいただき心より歓迎申し上げます。総務省をはじめ、実行委員会や関係者の皆様におかれましては、平素から過疎地域の振興のため、格別の御尽力と御高配を賜っておりますことに深く感謝申し上げます。

また、昨日の全体会にて優良事例表彰を受賞された団体の皆様方には心よりお慶びを申し上げます。

宇城市は九州ならびに熊本県のほぼ中央に位置し、平成17年に5つの町が合併して誕生した海、山を擁した東西31キロの市であり、デコポンをはじめとしたフルーツや施設園芸が盛んな農産物に恵まれた土地柄です。近頃はシャインマスカットが人気で、今の季節は太秋（たいしゅう）という柿がお勧めです。人口は約5万7,000人で、JR鹿兒島本線や三角線が通り、3つのインターチェンジを有するなど交通アクセスも良く、住むにはちょうど良い町であります。

しかしながら海岸部の三角町と、山間部の豊野町が過疎地域に指定されており、宇城市でも人口減少、少子高齢化が喫緊の課題であります。ここ数年は、新型コロナウイルス感染症の影響

により人々のライフスタイルや価値観に大きな変化が生じており、さらにコロナにより働き方の変容が加速しているところです。豊かな自然、農地、森林を生かした田舎の良さをPRすることにより、移住、定住先として再発見いただき、過疎地域の持続発展の可能性を見出せることを期待しております。

本日、事例発表いただく予定の三角町の宮川将人さんは、「くまもと☆農家ハンター」として地域を盛り上げ、多方面に発信し、笑顔いっぱい三角を、そして宇城市をけん引されていることは市にとって誇りです。多方面で表彰を受賞され、講演をされている方ですので、本日も興味深い話が聞けることと期待しています。

また、午後からの現地視察に御参加の方は、「道の駅 不知火」、「ジビエファーム」、「宮川洋蘭」、「世界遺産 三角西港」を回っていただきますが、豊かな自然、食、歴史文化など、宇城市の魅力を感じていただければ幸いです。

最後になりますが、本日御参加の皆様の今後益々の御活躍、御発展を祈念いたしますとともに、全国各地の過疎地が元気あふれる魅力的な地域になることを祈念申し上げ歓迎の挨拶とさせていただきます。

今日は、ようこそおいでいただきました。ありがとうございます。

## 過疎地域持続的発展優良事例発表団体



美国・美しい海づくり協議会 余別・海HUGくみたい(北海道積丹町)

連盟会長賞

### 資源が循環するまちづくり

積丹町は基幹産業である漁業を中心に発展してきた町であり、観光客入込数は令和元年度に120万人を超え、毎年6月から8月のウニ漁業の期間に集中している。この期間に来訪する観光客の多くが高級ブランドとして知られている「積丹ウニ」を求めて町内の飲食店を訪れており、「積丹ウニ」の人気や需要に応えるためには、安定的な生産や供給体制の確立を図る必要があった。このため、浅海漁業者で組織した2つの活動団体が、平成27年からウニ殻を肥料としたコンブの養殖や藻場造成を行うとともに、生産したコンブをウニの餌料にする資源循環の取組を進めており、漁業生産等の経済的効果に加えて、生態系保全機能と環境保全機能が期待されている。これまで廃棄物として扱われてきたウニ殻から新たな価値を創出するなど、地域が一体となって循環型社会の実現に向けて取り組むことにより、過疎地域の持続的発展に寄与している。



ねばむら  
根羽村(長野県根羽村)

総務大臣賞

### ねばー ギブアップ

根羽村は昭和30年の人口3,282人をピークに減少の一途をたどり、令和4年1月には885人まで減少し、この解決の一助とするため外部人材の積極的な登用等による新たな地域づくりが始まった。令和元年には地域おこし企業人制度(当時)の活用をきっかけに、派遣された社員が村へ移住し、外部から村の魅力・価値の再発見と情報発信が進められ、また、村の中間支援組織の立ち上げ運営に関わることとなり、一過性ではない外部人材との協働の大きな流れができた。少子高齢化・地域産業の持続・地域の担い手確保といった中山間地では避けられない課題に取り組み、村への移住者や外部人材の生活拠点となる「トライアルハウス」を設けた取組等の多面的で先進的な活動が、関係人口の増加・移住施策の推進ともつながり、令和3年から令和4年にかけての人口増という成果を上げている。引き続き官民協働、流域連携による地域づくりが見込まれる。



ひだ  
飛騨市(岐阜県飛騨市)

総務大臣賞

### 人口減少先進地の挑戦! 地域を超えて支えあう

#### 「お互いさま」が広がるプロジェクト「ヒダスケ！」

「ヒダスケ！」は、困りごとや地域課題を交流の資源として捉え、人と人とのつながりと支えあいを構築する新しい活動で、地域外の方との接点をつくるために、観光や移住とは違う切り口から着想をした活動である。市民の困りごとや地域の課題を解決するプログラムを住民が作成し、プログラム主催者が「ヌシ」、参加者が「ヒダスケさん」と呼ばれ、参加者には参加後「オカエシ」として主催者の創意工夫で用意する野菜等のお礼や電子地域通貨「さるぼぼコイン」を用意するなど、令和2年4月の運用開始から100以上のプログラムが生まれ、延べ1,000人を超える参加者があり、地域経済の一助となっている。平成29年から「飛騨市ファンクラブ」を設立し、全国の10,000人を超える会員と交流を深めるとともに、ウェブ上でマッチングを可能にすることで、コロナ禍であっても地域や年齢の垣根を超えて、幅広く参加者を募集することができ、主催者・参加者にとつて満足度の高い取組となっている。



100プロ(広島県北広島町)

連盟会長賞

### 地域の児童数を100人に!

「平成30年に小学生の保護者であった3人が、このままでは新庄小学校の児童数が減少し、3年後にはすべての学級が複式になるという状況を防ぐため、10年後の児童数を100人に増やすことを目的に立ち上げたのが本団体である。現在は旧大朝町全体の児童数を増やす活動に広がっており、若年層から高齢者までの幅広いメンバー約60人が参加する。団体内に役職は設けず、やってみたい人が「この指とまれ」方式にてチームを組み合わせながら、自由に活動を行っている。「魅力ある地域、魅力ある教育、住む場所」というテーマを基に情報発信し、この地域ならではの「人の好き・自然・風景」を活かしながら、自然体験プロジェクト・移住者を孤独にさせないための女子会プロジェクト・カレンダー&写真展プロジェクトなど、子育て世代をはじめ若者の移住・定住者を増やす活動を行っており、地域団体や学校との連携、交流人口・関係人口の創出に取り組んでいる。



くまもと☆農家ハンター(熊本県宇城市) 令和2年度過疎地域自立活性化優良事例表彰 連盟会長賞

### 厄介者を地域の宝に変える! を目指して

2016年県内の若手農家130人の有志でスタート。イノシシによる被害から「地域と畑は自分たちで守る」ことを理念に掲げ、銃を使わずICTやAIを利用した効率的な鳥獣対策モデルを作り全国に波及させることで、被害に苦しむ地域の希望の星☆となることを目指している。2019年に(株)イノPを設立。ジビエファームを起点にしたエコサイクルは国連のSDGs優良事例で紹介。2020年には情熱大陸で特集されるなど注目を集める。

## 【過疎地域持続的発展優良事例発表会】



### コーディネーター

過疎地域持続的発展優良事例表彰委員会 委員長  
早稲田大学 名誉教授

**宮口 侗廸氏** (みやぐち としみち)

1946年富山県富山市(旧細入村)生まれ。

東京大学地理学科同大学院博士課程にて社会地理学を専攻し早稲田大学に勤務、1985年教授、その後教育・総合科学学術院長を歴任。2017年名誉教授。

国土審議会専門委員、大学設置審議会専門委員、自治大学校講師、富山県景観審議会会長、富山市都市計画審議会会長を歴任、2021年3月まで総務省過疎問題懇談会座長として、新しい過疎法の制定に尽力、地方の発展のあり方について発言を続ける。1985年から富山市在住。

『過疎に打ち克つ―先進的な少数社会をめざして―』(原書房)ほか著書多数。

宮口／ご紹介いただきました宮口でございます。ご存じの方はもう少なくなっているかもしれませんが、過疎法が初めてできたのは、昭和45年(1970年)、すでに52年経過しております。ちょうど私が大学を出る頃にあたりまして、卒業論文をはじめ、今過疎地域と言われている地域とずっと50年付き合っていて参りました。今日の役目も10年以上続けさせていただいております。毎年過疎地域で頑張っておられる方々の発表をここで聞かせていただくのを楽しみにしております。今日も5つの発表、よろしくお願ひします。

最後の「くまもと☆農家ハンター」は、令和2年、熊本県でこの過疎シンポジウムが開催される予定でしたが、大会が中止になり、東京で表彰式だけ行いましたが、このような発表会をやっておりませんでしたので、今回、登場をいただくということになりました。

それでは早速、事例発表に移らせていただきたいと思います。まず、一番目は、北海道の「美国(びくに)・美しい海づくり協議会余別(よべつ)・海HUGくみたい」さま、よろしくお願ひします。

びくに  
**美国・美しい海づくり協議会、**  
よべつ  
**余別・海HUGくみたい**  
(北海道積丹町)

資源が循環するまちづくり

水鳥／「美国・美しい海づくり協議会、余別・海HUGくみたい」の水鳥と申します。よろしくお願ひいたします。それではこれからウニの町、積丹町の取組み、持続可能な地域社会の実現に向けてということでご説明させていただきます。

まず、積丹町を訪れる観光客の数ですが、大体年間100万人ぐらい訪れます。その方たちは、ほとんどがウニの漁のシーズンに来られていて、積丹町の名産品のウニを求めて、たくさんのお客さんが飲食店へ来られます。

一方で、ウニの漁業の実態ですが、やはり全国的に広がっている磯焼けの現象により餌不足によって漁業生産量が非常に不安定な状況が続いています。この磯焼けというのが、どうして起こるのかということなのですが、まずこのような環境変動によって水温が上昇すること、栄養が不足すること、そして胞子が不足するこ

とによって藻場が減少します。そうすると餌がないので痩せたウニばかりになって、それがまた藻場を食害するという、こういう負の連鎖が続いて磯焼けの現象が続いている状態です。

そこで、われわれは、海の森づくりと称して餌となる藻場づくりを行ってきました。まず、最初に海藻を食べつくすウニを除去して昆布を育てる畑を造成します。その次に、胞子を出す昆布を設置する、種まきです。そうして昆布の成長を促進する窒素やリン等を溶出する肥料を投入する、施肥です。そして最後に、その効果を確認するというモニタリングを行います。このように陸の畑と同じような形式で海の森づくりを行っています。

さらに、海の森づくりと合わせて、養殖によってウニの餌となる昆布、細目昆布も作っております。またさらに、この昆布の養殖施設には、幸いなことに今は北のスーパーフードと呼ばれる“ダルス”という海藻も生えておまして、この商品化も今検討中でございます。このように海の森づくりや、養殖による昆布の生産ができるようになったことから、身入りを促進するためのウニ漁場への給餌ですとか、痩せたウニを活用したウニの海中肥育、さらに安定供給を目指したウニの陸上畜養などもできるようになりました。

もう1つ、この昆布の養殖にウニ殻を使って、これを肥料にした、そういうことによって養殖の生産量を増加することができました。それによって食用としての開発ですとか、家畜飼料としても使うことができるようになりました。さらに、このウニ殻肥料を海の森づくりにも活用して、藻場を再生することもできるようになりました。このウニ殻肥料の取組みについて、これからご説明させていただきます。

積丹町は、実はウニのむき身生産をやっているのですが、そうするとどうしても殻が残ってしまいます。その殻が今までは廃棄物として処理をしていたのですが、その量が年間で100トンぐらい、大量に出てきてしまいます。なんとか

これを資源として有効利用できないかということで、平成27年度から町で「漁業系廃棄物資源利活用推進事業」というのを実施してきました。その中で、殻に含まれる栄養分、窒素やリンが海藻の肥料にも使えるのではないかとということを考えて試験を行いました。このように殻を粉砕してロープに付けて、それに昆布の種苗糸を付けて養殖施設に垂下してみました。

その結果、初年度の結果は、何もしていない通常の養殖の方法に対して、ウニ殻を肥料として使った養殖では、重量で約3.7倍もの差が出てきました。1年だけではまだ分からないので、もう1年やってみました。すると、2年目もやはり1.3倍の収量が採れるようになりました。このようにウニ殻肥料で昆布の生産量を増加できることが分かりました。

それで、ウニ殻に含まれる成分で増産できることが分かったことから、ウニの餌だけに使うだけではなく、他にも利用できないかということで食品への加工や、畜産飼料への利用も検討しました。乾燥した昆布ですとか、生の冷凍品を作って販売もいたしました。さらに、家畜飼料として羊に与えたところ、非常に上質な肉ができるようになりました。このように水産だけではなく、畜産にも応用できるようになりました。

養殖昆布で良い結果が得られたことから、磯焼け漁場の肥料にも使えないかということで、漁場用のウニ殻肥料を作ってみました。作り方ですが、ウニ殻を粉砕して、天然ゴムを混合して、そして乾燥して固めるという非常に簡単な方法でウニ殻の肥料を作ることができるようになりました。このウニ殻肥料の特徴ですが、原料は天然素材であるウニ殻と天然ゴムだけということで自然に分解されて環境への負荷が全くないということが分かります。そしてウニ殻肥料の作成には大型の機械や、人数を必要としない、非常に効率的にできることが分かりました。また、海中への設置は小型漁船で運搬して、人手で投入が可能という非常にこれも省力化が図

られることが分かりました。ということで、ウニ殻肥料は海の施肥事業の革新的な経済的、かつ省力化技術ということが分かりました。このウニ殻肥料を実際に海の中に入れた試験の結果ですが、初年度の平成2年5月の結果ですが、やはりウニ殻肥料を入れたところにだけ昆布の森ができました。1年だけでは分からないので、2年目も同じように試験をやってみたところ、やはりウニ殻肥料を入れたところには昆布の森ができて、入れてないところには昆布の森はできませんでした。さらに、3年目もやはり、ウニ殻肥料を入れたところには、このように昆布の森ができて、ウニ殻肥料を入れてないところには昆布は生えませんでした。このように細目昆布の森が形成されてウニ殻肥料の効果が実証できました。

昆布の藻場ができたのですが、これによる経済効果はどれくらいかということで、ウニの生産で比較をしてみました。その結果、昆布の生えてないところで採ったウニはあまり身が入っていませんでした。しかも、身の色や、形、味も非常に悪いB級品しか採れませんでした。しかし、ウニ殻肥料を入れて藻場が出来た方は、このように身が十分に入って品質も非常に高い極上品のウニが採れました。重量で見ますと、全重量に対する生殖腺の重量の比率なのですが、ウニ殻肥料を入れた試験区は23.3%に対して、対照区の方は15.7%と約1.5倍の差がありました。ということで、ウニ殻肥料で藻場を作ることによって、生産量で1.5倍、さらに身の

品質による価格の差も加えると、経済効果は非常に大きいということが分かりました。このように、ウニ殻肥料を使って昆布の森を作ることによってウニ漁業の生産性を上げられることが実証できました。つまり、ウニと藻場の循環型再生産が実践できたこととなります。

ウニ殻を使って、それを栄養として藻場を作るというこの循環型再生産が可能になると、さらにいろいろな効果が生まれてきます。まずは、安定生産による“持続可能な漁業”が可能となります。そして、ウニ殻を廃棄物として出さない“ゼロエミッション”ということになります。さらに、藻場を作ることによって、藻場の持つCO<sub>2</sub>を吸収する能力、つまり“ブルーカーボン”がここで機能します。それによって“カーボンオフセット”による“カーボンクレジット”ということも可能になってきます。

さらに、藻場が持つ本来の機能、“生態系保全機能”によって種の保存や、生物多様性や、生産増大が可能となってきます。また、養殖や藻場を作ることによって、餌の昆布を確保することができることによって養殖、肥育や、畜養などの新たなウニの生産手段も可能となってきました。

またさらに、このウニ殻肥料を農林業用の施肥材として使って森を作って、その森から出る栄養が海へと流れて藻場を作ることにも繋がります。

さらに、昆布を安定的に生産できることによって食品開発も可能となりますし、昆布を使った畜産肥料で上質な肉を作ることにもできるようになりました。

このように循環型による効果は実はSDGsの12番目の「つくる責任、つかう責任」という目標と、13番目の「気候変動に具体的な対策を」という目標、さらに14番目の「海の豊かさを守ろう」という、こういう持続可能な開発目標に繋がる取組みとなりました。このように漁業者によるウニの生産や、飲食店による消費活動が藻場造成へと繋がり、さらに、漁業生産を向



上させて、またさらに地球環境も守ることにつながりました。

最後になりますけれども、このような私たちの活動がいろいろなコンテストで入賞したことにより、テレビや新聞で数多く報道されたことによって、このウニ殻の肥料の活動が全国的に広がっていております。これからも私たちは環境と調和した持続可能な漁業を続けていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

宮口／ありがとうございました。本当にいい話ばかりというか、SDGsにもつながり、しかもこれが全国に広まりつつあるということで、とても素晴らしいことだと思います。

ウニの殻が肥料になるというのは、いつ、誰が考えられたんですか？

水鳥／ちょうど3年前になるのですが、それまでウニ殻の有効利用を検討している中で、実は畑、積丹町の農家でも以前から畑の肥料としてウニ殻を使っていたのです。そうだとすれば、同じ植物、海藻にとってもウニ殻を肥料として使えるのじゃないか、ということから発想して試験を行ってみました。

宮口／誰が発想したんですか？

水鳥／私です。

宮口／それは素晴らしい。やはり、誰かが気が付かないと始まらない。

地域の産業、過疎地域における産業の発展に大いに貢献しておられる、大変素晴らしい展開だと思いました。どうもありがとうございました。

水鳥／ありがとうございました。

宮口／続きまして、総務大臣賞を受賞された長野県根羽村から、「ねばーギブアップ」をテ-

マに事例発表をしていただきます。それでは、よろしくお願ひします。

## 根羽村

(長野県根羽村)

ねばー ギブアップ

大久保／皆さん、おはようございます。長野県根羽村の村長 大久保と申します。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

それでは私の方から「ねばーギブアップ」というような形で村の紹介をさせていただきます。根羽村は、長野県のちょうど最南端に位置しており、矢作川の源流地になります。矢作川は、三河湾に進んでおりますけれども、源流地にひとつの大きな流域がありまして、そこを中心にさまざまな取組みをしているところです。根羽村には、「Rana neba」という学名を持ったワンと鳴くネバタゴガエルもおりますので、ぜひ時間がありましたらホームページ等でご覧いただければと思います。

また今年、根羽村は、SDGs 未来都市に選定をいただきました。グリーン社会を作っていくんだ、そんな取組みを今まさに始めようとしておりますので、時間がございましたら、こういった取組みもご覧いただければありがたいと思います。

根羽村は、人口が今890人くらいなんですけれども、そういった中で、この持続可能な地域を作っていくための3つのポイントとしては、1つ目は、トータル林業、2つ目は、地域にある全ての資源を活用して循環を回す、3つ目に、さまざまな形で連携を取りながら地域づくりをしていく、その3つが大きな私どもの村づくりのポイントになっています。

そして、根羽村は92%が森林ですので、森を作って、さらにそれを使っていく、こういったものを循環させる仕組みを作りながら、そこ

にさらにきちっとしたFM認証ですとか、CoC認証（流通・加工認証）ですとか、あるいはSDGsの取組み、こういったものを地域の中で回しながら、さらにそれをひとつの流域、都市部と連携しながら地域を作っていく、応援していただきながら作っていく、そういった村づくりをしています。

また、森林についても、「里山林」、「生産林」、「環境林」というような形でゾーニングをして山をしっかりと作ろうという取組みを、これは長い時間掛かるとは思いますが、今始めているところでは。

また、しっかりと木を使っていくということ。オリンピックの選手村ビレッジプラザは、全国63の自治体が木材を提供させていただいて選手のために作った施設で、もう今すでに解体して、地元へレガシーとして使うように戻ってきていますが、こういったものに使われたり、あるいは、「サントリーの大町の水工場」だとか、長野市に「いろは堂」さんというおやきの大きな工場ができたのですが、こういったところにも、こういう地域材がしっかりと使われてくる、そういった時代にも、まさになってきております。

そして、ここからが私どもの村づくりと言いますか、今回のポイントになっていくわけでありまして、一つは外部人材、流域連携と共同による地域づくりというような形になります。

ちょうど令和元年に、当時の地域おこし企業人、今は地域活性化起業人という形になりますけれども、その方が任期を終えたあと、地元で一般社団法人を立ち上げて中心になってさまざまな活動を起こしたり、あるいは「トライアルハウス」ですけれども、田舎に入りたいとか、興味があるという方は大勢いらっしゃると思うんですけども、その方々がお試的に、一旦ここで共同生活をしていただいて、そこからスタートして、ほんとに地域に入っていただくと、そういった拠点となる「トライアルハウス」を作っています。

さらに、ワーケーション施設「くりや」とい

う施設ですけれども、空き家を改修してここでさまざまな地域の皆さんとの交流ですとか、ここで公営塾ができたのだとか、あるいはワーケーションの施設ができたのだとか、そういった取組みが今始まっています。またさらに都市部での情報発信、そういったことも積極的に今行っています。

二つ目としては、地域資源の新たな活用の推進ということで、木材のカスケード利用、木をしっかりと使って付加価値を出していく、そしてさらにそこから仕事を作っていくというような形で、これは木のおもちゃ、愛知教育大学の先生とコラボしたりとか、実際、山にもともと廃棄するような木材をチップにして、これを発電用の原料として販売し、付加価値を付けていく、そういった取組みをしています。

また、今まさに私ども始めようとしたところですが、木をさまざまな形で利用していくことで、まず伐採した木をチップ化して、そこからセルロースを取り出して和紙を作って、この和紙を裁断して、木の糸を作って布を作っていく、こういった取組みを始めています。そんな中で、木の糸コンソーシアムという取組み、私ども単体ではこういったことはできませんので、いろんな仲間が大勢集まっていただいて、こういったチップ化をしたりとか、あるいは製品、木の糸ができますと、布になってしまうと、なんでもできます。例えばタオルですとか、服ですとか、今は、例えば壁のクロスだとか、そういった部分にもこういった木の糸がまさに使われようとしているところでは。そういった取組みをしっかりとる中で、私どもは消費ではなくて持続する循環経済を作っていくというように形で、木を伐採して、製材して、木の糸を作っていく、これTシャツ等を作ったりするんですけども、木の糸で作ったTシャツですので廃棄したときも、これは地球に還元されていくサステイナブルな商品であり、さらにこの商品の売り上げの一部を山づくりに還元してもらいたい。これが、木の糸コンソーシアムの一番の狙



いですが、そういった取組みを今始めています。またぜひ木の糸コンソーシアムというように形で情報を出していますので、興味のある方は、ぜひ見ていただいて仲間になっていただくとありがたいなと思っています。

また、取組み事例の3、教育環境の充実による村の魅力づくりってことですが、私ども人口が少ないので、学校をきちっと維持していく、というよりも次世代を担う子どもたちにしっかりと学んでもらう、そういった取組み、環境を作っていく必要があるということで、令和2年に小学校と中学校を合わせて義務教育学校、1年生から9年生までという学校を作っています。そうした中でさらに、先ほど矢作川の流域連携と言いましたが、その流域に安城市という非常に交流の深い都市がございまして、その安城市の皆さんから親子留学で、根羽村のこの根羽学園と一緒に来てもらって学ぶという、そんな取組みも始めております。

さらに今年度からですが、村の公営塾を作りまして、さっき言った「くりや」というワーケーション施設があるんですけども、そこで地元子どもたちがさまざまな学びを行っていく、特に後期課程の子どもたちにとっては進学だとか、そういった勉強にもなりますし、前期課程の5～6年生については、地域学を学んだり、いろんなことを勉強しながら週1回～3回、子どもたちが選択できるような公営塾も始まっております。

またもうひとつ、高齢者向けのタブレット教

室、これがまた非常に高齢者の皆さん興味を持っていただいて、今積極的に取り組んでおります。この講師は村の若い人たちが一緒になって、この体験といいますか、取組みをする中で、非常にこれはいいなと思っております。今まで例えば遠隔医療をしようとか、いろいろ行政のほうが一方向的にやろうとしても、なかなか成功しない事例だったんですけども、地域の高齢者の皆さんが自分からこういったものに興味を持っていただけることは、逆に地域医療ですとか、さまざまな面でこれから環境を変えていくというか、そういったものが変わるなということを大いに期待したい部分でありますし、若者との交流が積極的に行われている、それも非常にありがたいと思います。根羽学園の子どもたち、実際に山で、フィールドで、自分たちの夢を作ったり、山地酪農で放牧された牛と一緒に遊んだりとか、そういった取組みもしてございます。

次はもうひとつ、人材育成の充実ということになります。やはり昨日もお話ございましたけども、地域づくりにしろ、会社づくりにしろ、いろんなものに対して全てやはり人づくりであると思います。特に持続可能な地域づくりを目指して外部講師をお招きしてワークショップを開催したりとか、そういった取組みが非常に今効果を奏しております、村の若い人たちと役場の職員がいろんな話をしたり、そこで出てきたものを実際の地域づくりで実践していく、そんな取組みが始まっております。また小さな村ですので、私ども役場の職員は同時に複数の仕事をこなせる「多能工型職員」を目指そうよという形で、役場の職員がそういった研修をしたり、逆に職員が村民の皆さんの所に出て行って、いろんなお話をさせていただく、そんな体験といいますか、勉強も今始まってきました。

結びになりますけども、私ども、この流域圏というか、そういったものが国土を守るんだ、循環する地域づくりというのは非常に重要であるということ位置づけしております。私ども矢作川の源流地域でありますし、ひとつの流域

として考えたときには、そういったところには、人間が本来持っているはずの生きる力を目覚めさせる大きな力が潜んでいるんだぞということ、そしてさらに都市と流域の農山村は1つの共同体であるんだというような形、これを強く訴えながら、一番はやっぱりそこに住むわれわれがこの地域に「誇り」と「自信」を持っていきいきと生活をして、そのことを次世代にしっかりとつないでいく、そういった仕組みをいろんな人に関わっていただいて作るのがすごく大事だなというのを改めて感じておるところであります。

以上で、私ども長野県の根羽村の取組みの発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

宮口／ありがとうございました。この表彰団体というのは、表彰委員会の委員が手分けして訪問し、表彰を決めるわけですが、根羽村には私がお邪魔して、村全体が明るく活発に動いているということに大変感動して帰ってきました。最後に、人材育成についてもおっしゃいましたが、昨日、小田切さんの基調講演でも、この新しい過疎法がいかに過疎地域における人材育成ということに力を入れているかという話があったかと思います。そういう意味で、いろんなことができる人間、多能工型とおっしゃいましたが、そういう人材を育成することにも大変力を入れておられます。私がお邪魔したときに、外国人の女性ハンターがいらっちゃったと思いますが、紹介していただけますか？

大久保／外国人の女性の先生、ちょうどお昼を一緒にさせていただいて、そのお昼を作ったのは実は杉っ子さんという根羽村の地元のお母さんたちが地域食材を使ってしっかりとお弁当等を作る、そういったグループで10名程いらっしゃるんですけども、その方たちが核になっていただいたり、宮口先生がおっしゃったトライアルハウスに今住んでいる外国人の方は、トラ

イアルハウスに入って、狩猟の免許を取って実際に自分で罫でシカを捕獲して、解体処理場がありますので、そこで解体処理して肉を販売したりとか、そういった取組みもされているということで、非常に多様な人材が今根羽村には入ってきていただいて、その方たちがまた地域の人たちとうまくコラボレーションといますか、地域の人と上手な連携ができてるのが、ありがたいなと思います。

宮口／私がお邪魔したときも、その女性が「今、シカを解体してきたところですよ」といっておられました、すごく多様な方が住んでいらっしゃるなと思いました。移住コーディネーターの方もおられましたよね？ひと言紹介してください。

大久保／最初にも紹介させていただいた地域おこし企業人で入られて、今は一般社団法人を立ち上げた方なんですけども、そこのご夫婦の方が移住定住コーディネーターになっていただいて、しっかりと根羽村の実情を発信していただいて、逆にそこを通して、いろんな若い人だとか、興味のある方が入ってくる、そういったいい関係づくりができていますので、移住定住コーディネーターの役割は非常にありがたいなと思っています。

宮口／その方は、いわゆるSNSでとてもいい情報を発信しておられて、都会でSNSを使いこなしている人が意外に田舎の人間関係を求めて住み付いておられるというようなことをおっしゃっていました。本当に素晴らしい。そういうことを全国の過疎地域の人に伝えたいなと思って帰って参りました。どうもありがとうございました。

大久保／どうもありがとうございました。

宮口／それでは、3番目になりますけれども、総務大臣賞を受賞された岐阜県飛騨市から『人

人口減少先進地の挑戦! 地域を超えて支えあう「お互いさま」が広がるプロジェクト「ヒダスケ!」をテーマに事例発表をしていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

## 飛騨市

(岐阜県飛騨市)

人口減少先進地の挑戦!  
地域を超えて支えあう「お互いさま」が  
広がるプロジェクト「ヒダスケ!」

都竹/岐阜県飛騨市長の都竹でございます。よろしくお願ひします。今日は、飛騨市のファンづくり、それから関係人口のプロジェクトのお話を申し上げていきたいなと思ひます。

その前に飛騨市ですけども、岐阜県の最北端です。このとおり富山との境になりますので、岐阜県って非常に縦に長い県ですけども、一番北になります。飛騨高山がこの南になりますので、隣接しております。人口2万2661人、高齢化率40%を超えておりました、全過疎の市でございます。人口が大体30年で、全国の倍くらいのスピードで減少していくという過疎地域であり、高齢化率が30年後の日本を上回るペースで推移をしているということで、私たちは人口減少先進地だ、こういう言い方をしています。論理的に考えて、今増えているところでも人口は必ず減りますから、そういった意味では、未来都市だというような言い方もしております。ただ、その中で、いろんな課題が出てきていることは間違いのないわけでありまして、その地域の活力を維持していくためにどんなことが大事なんだろうっていう中で、ポイントになるのは、地域以外の方々との交流であると位置付けて参りました。

飛騨市は飛騨地域の中にあつて観光地でもあるわけですが、今から7年前に映画『君の名は。』というアニメ映画が大ヒットいたしました、飛騨市は聖地でございます。心を寄せてくださ

て聖地巡礼に来られるっていう方々がおられることは分かっていたんですが、そういった方々と、きちんと連絡を取り合うような関係を作る、見える化をするってことが大事ではないかと、このように考えて、飛騨市ファンクラブっていうのを作ろうということをおもいました。

2017年、平成29年の1月に飛騨市ファンクラブというのをスタートしました。5年半経つたんですが、今、会員数が1万100人を超えておりました、人口の2分の1に至ろうか、というような状況になっています。この飛騨市ファンクラブですが、こんな仕組みになっておりました、オリジナルの会員証をプレゼントいたします。さらに、1人1人に100枚、名刺を差し上げるといふことになっておまして、このオリジナル会員証を市に持ってきていただくと、いろんなプレゼントがお店なんかでもらえます。さらに、この名刺を人からいただいても、それでもお得なサービスが得られるということで、この名刺は紹介状のような役割を果たすわけです。名刺ですから、渡して使われると誰が渡したかということが分かりますので、たくさん渡して使ってもらった方には、プレゼントを贈ろうということ、名刺が30枚利用されると、梅コースでふるさと納税1万円相当分のラーメンとか、お野菜、50枚だと飛騨牛、100枚利用されると地酒とか、非常に立派なものがいただけるということで、ファンがどんどん増えていくということで究極のネズミ講というような言い方をしています。

今、9月末時点で1万183人ということで、全国47都道府県全てに会員がいるという状況になりました。そこで、こうやって人が増えてきたので、各地でファンの集いができるのではないかとことをおもひまして、平成29年度から日本全国各地でのファンの集いというのをスタートしました。東京から始めました。これまでに東京3回、岐阜3回、大阪1回ということで、コロナ禍の間、全く開催ができていないんですけども、その中でも、こうした形での

取組みを進めてきております。やってきているうちに、都市部でやるからいいんじゃないかと思っていたんですが、「飛騨市で飛騨市ファンの集いをやってほしい」という声が出て参りまして、これは一体なんだと思ったんですが、要するに飛騨市に行くネタが欲しいっていう方が非常におられるんです。そこで「飛騨市ファンの集い in 飛騨市」をやろうということにしました。ディープなところがポイントになりますので、要するに観光客が絶対行かないような、地元の間人しか行かないような焼き肉店とかで集いをやるということです。われわれの立場からすると、普通の飲み会をやるだけと、こういうことになるわけですけど、そういう取組みを進めてきました。

さらに、ファンの皆さん向けにバスツアーをやるということも考えまして、これは岐阜市周辺の無料の情報誌で、『月刊ぶらざ』というのがあるんですが、それとコラボしてバスツアーをやっておりまして、これまでに5回やっています。これは、私が町案内人会にも入ってよく町案内するもんですから、市長が町案内をするということの特徴にしています。さらに、岐阜市とコロナの間の売れ残った観光土産品を売るという、コラボの取組みをやったことをきっかけに岐阜市の観光プロモーション大使のタレントの方を飛騨市の観光プロモーション大使に任命するということになりまして、その方々のファンをターゲットにしたツアーなんかも開催をしています。

ただ、こうした先ほどの各地のファンの集いっていうのは非常にいいんですけども、とっても労力とコストが掛かります。全国各地どこでもっていうわけにいかないんです。例えばこの宇城市でやろうといても、職員がここに来て、会場見つけて、探して、募集をかけるっていうのは大変なことなんです。そこで発想を変えまして、各地で人が集まっていたら、例えば10人とか、20人とか集まっていたら、市長とか、職員が飛騨牛とか、酒を持っ

てそこに行きますという逆にする取組みを「おでかけファンクラブ」ということで始めました。今年、静岡県の静岡市と、北海道の釧路市で開催しています。ほんとに市長が飛騨牛持って、酒持って行くという、そういう企画です。

そして、そうした中で広がりが出てきて、ふるさと納税を飛騨市ファンクラブからしてくださる方が増えております。昨年度は、飛騨市ファンクラブ会員からのふるさと納税寄付額が3,000件、8,000万円という金額になっております。ふるさと納税は実入り、約2分の1ですから4,000万が純粋な歳入として、ファンクラブの会員から飛騨市に入ってきていると、こういうことになります。

コロナの間にこうした取組みがいろいろできなくなったこともあったんですが、今度は会員さんから持ち込みの企画があって「こんなことやりませんか」ということで、オンライントラベルを開催しています。あらかじめ市のいろいろな食べ物とか、お酒とかを送っておいて、それを同じ状況で参加者が同じものを持ちながらオンラインで各地をつないで中継をします。そして最後オンライン飲み会をやる、こんなことで取組みをしてきました。

今、ファンクラブは入会の特典を、先ほどのように非常に大きな寄付がいただけていますので、ファンクラブ会員限定のカタログ販売を開始して、送料の一部を市が負担する。あるいは、会員さんが市に泊まってくると、地域で使える電子地域通貨「さるぼぼコイン」のポイント



トを2,000円分付与するっていうことで、これ今大変人気になっています。

さらに、今年はファンクラブ専用のネットショップを開設したり、「おもてなしクーポン」っていうのを作っているんですが、1,500円分の割引クーポン、これを配るサポートセンターっていうのを設けると、そんなことも取組んでおります。

そんなことをしてきましたら、そのいろんなファンの集いとか、バスツアーに頼んでもないのに来て、手伝ってくださる方っていうのが現れ始めました。最初、「よく見るけど、どこの方？」なんていって職員に聞いていたんですけど、「いや、来てくださって、手伝ってくださるんです」とこんな話でありました。そういった方々が1人や2人でないんです。飛騨関係のイベントはほとんど毎回自費で、自分でお金を使って来てくださる。そして運営側にはっぴを着て手伝ってくださる。こんな方がおられます。もともと観光に來られて、それで飛騨市ファンクラブに入会して、いろんな案内が来るようになって、熱心な応援者になっていたという方です。また、アニメ『君の名は。』の聖地巡礼で2年半で18回も来た方で、そうやって来ている間に土産物屋のおばちゃんと仲良くなって、そこの触れ合いが楽しみで来るようになり、そしてその中でファンクラブのチラシを見て、ファンクラブに入って、いろんな行事に参加する間に常連のメンバーのようになっていったという方です。この方、結果的に移住されるんですが、そんなこともありました。また、石川県の方で、常連でしょっちゅう来て、われわれのスタッフとして手伝ってくださっている。このあと話す「ヒダスケ！」っていうの、プログラム考案なんかもしていただいています。

こうした方が、関係人口って方なんじゃないか。つまり、こういう方のことを関係人口っていうのではないかということに気が付いたわけです。関係人口っていうのは、整理をしますと、観光客以上、移住者未満とこういうことです。

観光客よりはもっと頻繁に通ったり、心寄せてくださるけど移住まではしないと、こういう方です。そういった方が、どういうタイプの人で、何をすると喜んでもらえるのか実験しようということで3つのテーマを設けて実験をしてきたわけでありまして。ここは割愛します。さらに合わせて一緒に提携をしております楽天さん、それからその縁で知り合った東京大学の先生、それから中央水産研究所の水産研究員の方等々と「関係人口の研究をしてみよう」ということで研究をしまして論文を発表します。これ、ちなみに論文奨励賞を受賞しているんですが、やってみて分かったことは、関係人口っていうのは移住しないってことです。移住を目的に関係人口を語るっていうのは間違っている。これは体感的にもそう思います。それから、滞在日数っていうのは重要ではないけども、1回滞在しているかどうかっていうのは重要であるってことが分かってきています。さらに、大事なことはここなんですが、印象深い経験、楽しいとか、自己有用感が感じられるっていう体験、これが非常に重要で、さらにその中で、知人、友人っていうのが増えてくるとというのが関係地に対する地域愛着度が高まるっていうことが分かってきているわけです。

そうしたことを基に2020年の4月に関係案内所「ヒダスケ！」というのを創設いたしました。これ一体どういうものかといいますと、飛騨市の中の困りごとをネタとして「こういうことを手伝ってください」ということをプログラム化する。そのプログラムの主催者を「ヌシ」と言います。そして手伝ってくださる方を「ヒダスケ！」さんと呼んでおります。「ヒダスケ！」っていうのは飛騨を助ける「ヒダスケ！」とこういうネーミングなんですけど、助けていただくとお返しがあります。これは例えば農作業を手伝うと、トマトだったりとか、そういうものだったりするんですが、市からも500ポイント、500円分の電子地域通貨を差し上げると、そんなことをやっています。そのマッチン

グをするのが、ホームページにありまして、「ヒダスケ！」のサイトっていうのを作っています。ここにプログラムをいろいろ載せているんです。例えば、「稲刈りと架干し手伝ってくれないませんか」とかあるいは、「大豆の苗の植え付け手伝ってくれないませんか」とかこんなことをやるわけです。具体的にどんなことをやっているかっていうと、例えばこれです。飛騨市の非常に風景のいい種蔵という地区があるんですが、もう今や集落8軒、15名、高齢化率56%ということで景観の保全が非常に難しくなっているんです。棚田があって、石積みがあるんです。その石積みの保全を手伝ってもらってという「ヒダスケ！」をやって、これまで延べで189人参加して、180平米、補修し復活させています。同じ地区が、耕作放棄地も増えているんですが、みょうがの産地でもあるもんですから、じゃあ、ここに「my みょうが畑」という、ここは自分のみょうが畑よっていうところを作って、年3回来てもらって、手伝ってもらおうっていう企画もやって。これも953平米、みょうが畑復活というようなことになっています。さらに、農業は親和性が高いんですが、農業の繁忙期っていうのは1カ月~2カ月で、人口減少先進地ですから、なかなか人が見つからない、求人しても人が来ないっていうことがあるので、手伝ってくださってということ。収穫とか、選果とか、選果場に持って行って出荷する手伝いするとかっていうことを手伝ってもらおう。これも人気のプログラムになっています。

さらに、実際に来るだけじゃなくて、オンラインで特産品の発信とか、ブランド化、SNSとかのPRを手伝ってもらおうと、こんなこともやっています。これは来なくてもできる「ヒダスケ！」という形です。これまでに2年半で143のプログラム、延べ参加人数が1,185人で、今年4月から9月までで426人ということですので、非常に人数が増えています。「ヌシ」の皆さんから、「やっぱり飛騨を愛する方々と出会えて楽しい」という声が聞こえていますし、

「ヒダスケ！」さんの方からは「市民の方の熱い思いを知ることができた。今後関わりたい」とか、「なかなかお会いできない人に会えてうれしかった」とか、そういう声が出ています。関係人口、この「ヒダスケ！」を通じて出てきたっていう関係人口の方々もお見えになって、「ヒダスケ！」の常連さんになっておられるということです。

こうした取り組みをやっているんですが、これ、私自身の体感的なものですけれども、大体この関係人口っていうのは、3つに分けられるっていうのが私の独自理論です。関心人口と交流人口、行動人口って3つに分けられると、こういってしまして、関心人口っていうのがふるさと納税をしたり、飛騨市のファンクラブに入ったりという人たちです。コロナ禍で実際に行事に参加されるのは10%くらいです。1割くらいです。これを交流人口といっています。さらに、「ヒダスケ！」のように実際に来て手伝ってくださる方が行動人口、これが1%~3%くらいだろうとみておりまして、そうするとこの裾野を広げていくと、この行動人口が増えてくるということで、飛騨市ファンクラブ、ふるさと納税からの連動をこう図っていくってことをやっておるわけでありまして。

キーワードは、「うれしい、楽しい、面白い」ということをいってしまして、この要素を追求していくことが一番この関係人口を深めていく、ファンを増やしていくポイントなんだろうということです。人交密度というようなことを書いていますが、この人交密度を高めることによって、多くの人に関わる懐の深い町づくりをしていきたいなと思っております。

以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

宮口/どうもありがとうございました。この飛騨市にも私が訪問しまして、今お話しになりました話をしっかり承って参りました。都市農村交流の新しい、新鮮なやり方を発案されたと

思っております。関心を持った中から交流する人が現れ、さらに最後は行動する人に至ると、今の市長さんの整理、大変よく分かりました。非常に素晴らしいことを発案されたと思って感心して帰って参りました。どうもありがとうございます。

それでは4つ目の事例発表に移らせていただきます。過疎地域連盟会長賞を受賞された広島県北広島町「100 プロ」から『地域の児童数を100人に!』をテーマに事例発表をしていただきます。よろしくお願いします。

## 100 プロ

(広島県北広島町)

地域の児童数を100人に!

大内/広島県北広島町から来ました、「100 プロ」の大内と申します。よろしくお願いいたします。今日は、「地域の児童数を100人に!」ということで、100プロ的、持続可能な活動スタイルということを紹介させていただきたいと思います。

まず初めに、「100 プロ」の拠点なんですけれども、私たちが住んでいるところは広島県なんですけれども、ほぼ島根県との県境であります。旧北広島町、旧大朝町で活動しています。私たちの地域っていうのは、広島県、島根県のちょうど真ん中にありますけれども、日本海、そして瀬戸内海のおいしい魚が、おいしい刺身が食べられるそんな地域でもあります。私たちは、「地域の児童数100人」ということで活動しているんですけれども、この目標に掲げた1つに、私たちの地域、子どもたちがすごく激減しています。僕の子どもが通っている小学校、新庄小学校っていうのがあるんですけれども、この小学校がもう何年かすると統廃合の可能性があるということで、このままではほんとに小学校がなくなってしまう。それで地域が駄目になってしまうということで、保護者で集まって、何か

しないといけないということで「100 プロ」を立ち上げました。

いろいろと勉強していく中で、地域の小学校、児童数だけではなくて、出生数が毎年1桁だということが分かりました。昨年度の旧大朝町の出生数はたったの8人で、これではまずいよなということで、2018年に新庄小学校の「100人プロジェクト」として始まったこの活動も翌年には旧大朝町全体の子どもたちを増やす、若い世代を増やそうということで目標を展開してきました。正直私たち、何をしたら子どもたちが増えるか、分かりませんでした。今まで地域おこしをやったこともない一保護者でした。そういった中で僕たちに何ができるのか分からないけれども何かしていこうよ、何か行動していこうよ、ということで、1つ1つ自分たちにできることはなんだろうかって、未来の子どもたちのために何かしようと動き始めていきました。

若い世代、子どもたちが増えてくためには何が必要なのかということを中心に話しながら、やはり住む場所が必要だよということ。そして、魅力ある教育環境が必要です。そして魅力ある町が必要だと、こういう3つの柱をどうしていこうか。情報発信していかないとけないということで、この4つの柱をもって「100 プロ」の活動を進めていこうとなりました。

「100 プロ」っていう活動の団体の中に実はこの「100 プロ実行委員会」という方向性などを決める組織があります。この中心になっているメンバーっていうのは、各チーム、8つのチームがあるんですけれども、そのチームのリーダーが集まっている実行委員会になっています。

このチームにどういうものがあるかといいますと、1つ目は、「写真展、カレンダーチーム」ということで地域の自慢の写真を募集した写真展や、カレンダーを作って、それを販売しています。

「女子会チーム」、これは地域に嫁がれた女性、または働きに来られた女性が、友達がなかなかできない、寂しいっていう思いから立ち上がり、

女子会の中で、まずはお茶をしながら会話を楽しんでちょっとずつ友達を増やして行って、相談、悩みごとを話したりできたらいいよねっていうことで立ち上がりました。

「自然体験チーム」っていうのは、子どもたちを対象とします。もちろん地域の子どもたちだけじゃなくて、地域外の子どもたちも対象に生きる力っていうものを学べる場を作っています。

「しおりチーム」というのは、小学校にあった木を利用してしおりを作り、それを卒業生にプレゼントしています。

「工作教室」というのは、最近田舎の子どもでものこぎりとか、金づちとか、カッターすらなかなか使う機会がなくなっています。そういった子どもたちのために地域の職人が集まり、ものづくりを教えています。

「人材バンク」というのは、小学校の授業の一環として、地域のプロの職人、例えば林業のプロであったり、そういう方が先生方と一緒に授業を教える、そのような人材を集める場所になっています。

「夢咲プロジェクト」というのは、あなたの夢をかなえてあげよう。子どもたちの夢をかなえてあげようというチームです。高校生を対象にした育成塾なども始めています。

こういった8つのチームがそれぞれ独立して資金も自分たちで調達しながら活動を進めています。地域組織である地域協議会であったり、行政であったり、学校関係であったり、企業であったり、いろいろ今地域を巻き込みながらちょっとずつ大きくなっている団体になっています。

この各チームの活動なんですけれども、映像を作ってきています。ご覧ください。

どちらかという僕たちの活動っていうのは、わくわくする、みんなが楽しいっていうようなそんな活動をしています。そういった活動、わくわくするような活動を進めていく中で、地域っていうのは、やはりどういった形になっているかという、どうしても地域住民って

うのは、子どもたちがいなくなっているんで、これからどうなるんだという諦め感もありますし、若い人たちっていうのは、高校生、やはり都会に出て行きます。でも、そういったマイナスなイメージではなくて、この地域が、1人1人が生きる地域を創造できる、ほんとに活躍できる場を提供する、自らが作る、そういったことを目標にしています。

もう1つは、この地域に移住してでも住みたい、そういった地域を作ろうとしています。「100プロ」の持続的な活動スタイルなんですけれども、先ほど申しましたように1人1人が生きる、活躍の場を持てるような形を作るっていうことで、やってみたいことをやっています。やりたいと思った人が、やってみたいことを旗揚げし、仲間を集めて実行しています。いわゆる「この指とまれ」方式で、「僕これやりたいです。どうですか？」っていう形で仲間を集めて進めています。

次に年間計画は作っていません。それはなぜかという、年間計画を作ってしまうと、義務になってしまって、だんだん面倒くさくなってくると思うんです。その中でわくわく感がなくなっていくので、年間計画は作らずに、やりたいときに仲間を集めて実施するっていうことをやっています。

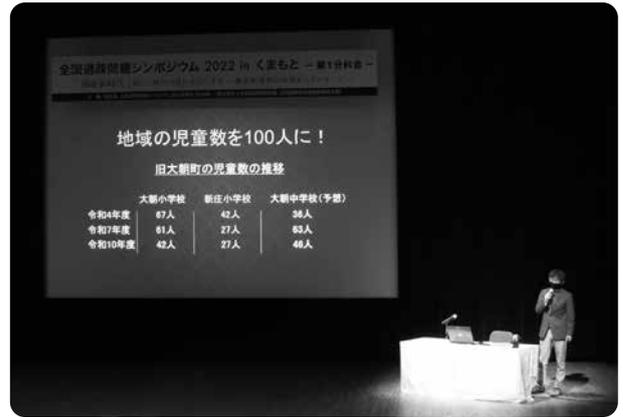
次に会長、副会長などの役職は置いておりません。やりたいと思う人がリーダーになって、それぞれのチームが独自で活動しています。富士山に登るルートっていうのは、いろいろあると思います。「100プロ」は地域の児童数を100人ということを目指しています。各チームリーダーは、それぞれ考え方も違います。でも、目標は地域の児童数を100人にしようということを目指しています。ですので、いろいろな考え方、いろいろな方法があるということで、それぞれのリーダーが独自で「自分たちで頑張るんだ。この地域に子どもたち増やすんだ」ということをやっています。

今現在30代～70代のメンバー、約60名が

参加してこの「100 プロ」の活動を進めています。持続可能な地域活動のあり方、いろいろあると思います。ただ、「100 プロ」は次のようなことを考えています。「100 プロ」は2028年で活動を一旦区切る予定にしています。それはなぜかというと、「100 プロ」のメンバーのモチベーションを維持することです。やはり、地域おこし、ボランティアってというのは、すごく結果が見えにくく、モチベーションを保つことは難しいです。ですので、ゴールを作ることで、「10年後の2028年まで、俺たちはここまで頑張るんだ」というような目標を持って今進めています。

ただ、このまま終わるわけではありません。次世代のために新ビジョンの準備も今始めています。それはどういうことかといいますと、やっぱり持続的な取組みにつなげるためには変化に対応できる創造性の育成が必要だと考えています。どういうことかといいますと、自ら考え行動できる人材、創造家を作ることを目指しています。この創造家を作るには、どういうことが必要なのか、今思っていることは、夢を自由に語る、実現できる町、私たちが住んでいる地域がそういう夢を語る事が素晴らしいんだ、いいことなんだっていう、そういう雰囲気をもつていくことをやっていこうとしています。この地域が作り上げる発想者であったり、リーダーであったり、起業家であったり、政治家であったり、自分たちがこの地域を作るんだっていう、そういう人材をこれから作ろうと、そしてその人材が次につながる、その結果、地域の児童数が100人になっていく目標を維持し続けることを目標に頑張っています。

「100 プロ」的、持続可能なスタイルなんですけれども、「役職に縛られないチームづくり」、「年間活動計画は作らない」、「2028年で活動を区切る」、「創造家を作る」、この4つの目標で活動を進めています。私たち「100 プロ」は地域に小さなしずくを落としました。そして、そのしずくからちょっとずつ輪が今広がっている段階です。この写真のように私たちは、地域の



方々に本当に支えていただいています。そして応援してくれる方々がたくさんいます。その中で、今回このような会場に立たせていただいていることも事実です。

最後になりましたが、わくわくするところに人は集まると思っています。私たちの活動、今から、これからです。地域の児童数を100人という目標にこれから頑張っていきますので、よろしくお願いいたします。

ご清聴ありがとうございました。

宮口／どうもありがとうございました。「児童数を100人に」という非常に分かりやすいテーマを掲げられて、地域活動を楽しく行われています。役職は作らず、自由な雰囲気、8つのチームがあるとおっしゃいましたが、非常に楽しく工夫されたやり方かなと思いました。これはいってみれば、今の時代に合うコミュニティーづくりとでも言えるかもしれません。そこに100人の「100 プロ」という分かりやすい名前があり、分かりやすいテーマがあるということで、皆さんが元気にやり取りをできるのかなと思いました。多少移住者も増えてきているんですか？

大内／僕たち「100 プロ」の活動が理由かどうか分かりませんが、子育て世代は数人、そうではなくご年配の方であったり、単身の方であったり、いろいろ増えているのは事実です。

宮口／そうですか。一応 2028 年で 1 区切りにするとおっしゃっています。なかなか 100 人になるというのは、難しいのかもしれませんが、そうやって分かりやすく頑張っていこう。非常に小さな単位で分かりやすく、明るくという、そういう点で大変素晴らしい活動だと受け止めさせていただきました。以前、「い～ね！おおあさ」さんを表彰したことがあるんですが、同じ地域ですよ。

大内／そうです。「い～ね！おおあさ」さん。同じ地域で、この「100 プロ」活動にもいろいろとご協力をいただいております。

宮口／分かりました。どうもありがとうございました。

大内／ありがとうございました。

宮口／それでは最後になりましたが、本会場でもある熊本県宇城市より「くまもと☆農家ハンター」から、『地域と畑は自分たちで守る！』をテーマに事例発表をしていただきます。よろしく願いいたします。

## くまもと☆農家ハンター

(熊本県宇城市)

地域と畑は自分たちで守る！

宮川／皆さん、全国からこのウキウキ宇城市に来ていただきまして、ほんとにありがとうございます。

私たちは 2016 年からこの「くまもと☆農家ハンター」活動というのを始めています。ここに☆マークが入っています。この☆マークというのは、地域の希望の星になりたい、そんな気持ちを表しています。当初からこの「地域と畑は自分たちで守る」というキャッチフレーズ

をずっと動かさずに活動を続けてきました。

今日お伝えしたいのは、3 つです。1 つ目が、「自助、共助、公助」、2 つ目が、「地域のヒーローを作る」、3 つ目が「微力でも無力じゃない」ってことです。私たちが取組んでいるのは、農家自らがほんとに小さな課題から解決していこうっていうスタンスでいます。「シンク・グローバリー、アクト・ローカリー (Think Globally, Act Locally)」を考えながらも私たちには地球規模の環境だったりとか、社会問題までは届かないです。

でも、自分たちが自分たちの住む地域を変えていくっていうチャレンジをしている中で、なぜ私が鳥獣対策に出会ったかということ、地域のおばちゃんが 2016 年の 2 月 15 日に「もう農業やめようと思う」っていう話でした。まだおばちゃん 60 歳ですから若手です。初めてイノシシ被害にあって、怖くて、また作っても、また食べられる、もう営農意欲が落ちてしまって、「もうやめちゃう」っていう話を聞いたときに、初めてその深刻さを知りました。

ただ、このおばちゃんだけじゃなかったです。周りを見てみれば、全国的に広がっていて、この中山間地域で作られる果物だったりとか、旬を伝えてくれる日本の野菜っていうのが、まさに鳥獣対策で、深刻な状況になっていきました。ちょうど里山に位置する機械化がなかなかできないような地域に住んでる人たちが農業を続けられなくなったらどうなるかっていったら、食の多様性っていうのが一気に失われていきます。なかなか儲かりにくい農業でもあります。でも、誇りを持って作ってくださっているのが、中山間地の小さな農家です。さらに、衝突事故とかも地域の中で多発していました。実際に見たままにしていくと負の連鎖っていうのがもうグルグル起きています。鳥獣対策、どうしようもできない。荒れたままにした畑に、またイノシシが入って、子どもたちと接触したりとかして、そういうのが自分たちでもなんとかできないかなと思っています。85% の市町村、過疎地

域の皆さんであれば困っていないところなんかないと思います。

こういう理由がいろいろありますけれども、なぜ増えたか？それは農産物の味を覚えさせてしまったっていう農家の問題もあるかなと私たちは考えて、このキャッチフーズを作りました。自分たちで守っていくんだって。昨日お話にあったように、まさに当事者になっていくんだっていう話を消防団のように獣害から地域を守る活動等を定義しました。

工夫したのは、この3つです。農家、ファーマーが、サイバーの力を使って、野生獣から地域を守るハンターになると、この3つの組み合わせをすることによって解決の糸口が見つけれらるんじゃないかなと思って銃を使わずに、箱罠で待つて捕る方法をまず第一にしました。それは安全性だけではなくて、農業をしながら鳥獣対策を成り立たせるっていう工夫、そして不必要に山にいるイノシシを捕らないっていうルールを課したからです。

2つ目は人に期待してばかり、行政ばかりに期待している、そういうのは僕らはやめようと思って、農家自らがハンターになることを選びました。

そして勘と経験からの卒業です。今はテクノロジーがあります。今まで見えなかったイノシシの姿もつぶさに見えるようになりましたし、スマホを使うことで見回りも劇的に楽になりました。一番良かったのは、初めは猟師さんから僕らは「生意気だ」って言われていました。でも、出沒データをずっとデータ化、可視化することによって、例えば11月15日になると夏場増えていたイノシシが一気に減ることが分かりました。なぜだと思いませんか？初めは僕らも分かりませんでした。これは狩猟期になった途端に猟師さんが猟犬を連れて山を走るからです。猟犬のにおいによってイノシシが恐れて山に帰るんです。これを僕らは可視化できたので、猟師さんに「猟師さんたちのおかげで、こういう里山が守られているんです」という話をした

ら、「分かってるじゃないか」という形で今では猟友会との関係も非常に良好で、九州の猟友会の技術者の皆さんに私たちのテクノロジーを使った鳥獣対策をレクチャーするような関係にまでなりました。

ただ、捕獲っていうのは一番最後のやり方です。まず、皆さんが関心を持って勉強してもらうことから入るっていうことで、皆さんに鳥獣対策に対する関わりしろっていうのを広げてきたことが私たちの1つの良かった点かなと思っております。これから行くこの戸馳島っていうところを拠点に地域全体へ広がっていきました。今では、普通の農家の人、普通の区長さん、そんな人たちが鳥獣対策と一緒に乗り出してくれるようになりました。この地域っていうのは、そもそもイノシシが一頭もいなかったところなんです。それが10年前ぐらいから増えてきて、急増して、私たちが頑張るもんですから、年間1,000頭まで増えました。でも、青天井かと思っていただけなんですけども、ようやく昨年減少傾向に入りました。なかなかないと思います。でも地域をあげて頑張れば、鳥獣対策、鳥獣被害っていうのは減らせるし、学校や住宅地への出沒も激減させることができました。ほんとに良かったなと思っているんですけども、やっぱり大変なことっていうのはたくさんあります。両立だったりとか、なかなか川上から川下までやっているような先進事例っていうのは1つもなかったです。ですから、たくさん時間、お金、汗っていうのをかいてきましたけれども、一番きつかったのは、やはり、この捕まえた1,000頭をどうするかっていう話です。

私たちは元来、もともとの猟師じゃないので、命なんて奪いたくないです。でも、その前説していた状況をどうにか打開したいと思って始めたのが、このジビエファームです。ジビエの施設を作ればおいしいお肉にしたり、いろんな循環をさせられるかもしれないと思って、有志活動をやってきた中から発展させて起業しました。株式会社イノシシプロジェクト、イノPっ

という名前ですけれども、起業したっていうと格好いいですけども、民設、民営の施設を作る必要があったので、私たちは4,000万を調達するために会社を立てたっていうことです。会社を作って一番良かったことは、こういう出会いがありました。2016年に第1回のクラウドファンディングをしたときに、10万円入れてくれた学生がいたんです、大学2年生です。会いに行きました。そしたら、彼は授業で知って、それをどうにかできないかって、千葉の学生でしたけれども、そこから交流が生まれて、インターンで何回も来て、最終的には、宇城市に来て今活躍しています。今日は、京都に修行に行っていないんですけども、そういう若手が今後の世代として頑張っているのを誇らしく思っています。

できることはなんだって自分たちでやります。これはすごく嬉しかったんですけども、全国でジビエ施設ってほとんど、隠れるようにあります。でも、私たちは、今日見ていただければ分かるんですけども、鳥入ってすぐの一番いいところにあります。だからこそ、地域の希望の星になるような施設を作ろうっていう形で、大々的に落成式をして、ほんとに民設、民営ながら、多くの人たちに認められてこういうスタートを活動することができました。

今では、九州ジビエとして昨年から、クラウドファンディングからスタートして、来週月曜日にジビエのPRイベントで東京に行くんですけども、私たち、この九州ジビエの特徴は、加工食品にしていることです。硬いとか、やばいとか、臭いとかそういう次元を超えて、私たちは誰でもおいしく食べられるようなものを九州ジビエとして、ハムからソーセージにして、おいしく食べていただいています。この前日本一になりました。じゃあ、なぜ全国各地にあるジビエの中から日本一に選ばれたのか。ブランド豚とか、いろんな食品がある中での1等賞です。簡単です。彼らは収穫直前のコシヒカリを食べたり、デコポンを食べています。おいしい

に決まっています。すごく豊かに育っています。そんなジビエは、オーガニックのペットフードであったりとか、今では熊本市の動物園、大学と共同して屠体給餌っていう形で動物福祉の観点から給餌を行っています。

さらには、このような活用、一番ユニークなのは、なかなかお肉に向かないイノシシさんをこのミラクルマシーンに入れることによってわずか5時間で堆肥となって出てくる機械を全国で初めて導入しました。メーカーさんと一緒に共同開発して、それも今日、あとで現場で見させていただきます。私たちの答えでは、鳥獣対策の終着地点は、ジビエよりもこの堆肥化のほうが素晴らしいと思っています。ジビエ施設を運営させるためには相当なコストが掛かりますけども、ここであれば堆肥にして、花壇に戻したり、畑に戻したりすることができます。現に私たちは今、耕作放棄地をよみがえらせるプロジェクトをしていて、ここで使ったイノシシ堆肥を先週ですけども、このように収穫祭として子どもたちに無償開放したりとかしています。

いろんな活動をこうやって続けてきましたけれども、今一番思うのは、皆さんもすごくたぶんやきもきされる場所あると思います。外からどんなに火をつけようと思っても、そこに火をつけるのは難しいかもしれません。でも、私たちのように地域にいる人たちが火をともし、その活動が「俺もやるから、やろうよ」と、「あいつが頑張るんだったら、俺も頑張る」というような形でだんだん内側から広がって、



炎になって、それがだんだんボトムアップして  
いくっていう形がやはり地域づくりの過程では  
すごく大切なんじゃないかなと思っています。

特に私たち農民は、補助金を初めから期待し  
てしまいがちです。ただ、自分たちでやるこ  
とってというのは、たくさんあります。まず自分  
たちで守るために勉強する。そして柵を張る。  
地域の人たちと声掛けをする。その上でみんな  
でガシャガシャになって、どうしたら守れるか、  
どうしたら地域が残せるかっていう話をしてい  
く。僕らはイノシシコミュニケーションのこ  
とをイノコミって呼んでいます。それは何か  
っていったら、地域の皆さんはなかなか変化のない  
日々を過ごしているからこそ、ちょっと隣の人  
との悪口を言いたくなったりとか、世話をし  
たりなると思うんです。でも、共通の敵である  
イノシシやシカの話があれば、みんなが同じ方  
向を向いてワイワイたわいもない話ができたり  
するようになります。その上で、公助を期待す  
るっていうスタンスが一番いいのかなって思っ  
ています。僕らは、この宇城市の中では特にあ  
りがたかったのは、まだ獣がほとんどいなかった  
地域だったので、みんなイノシシしか知らな  
かったんです。でも、僕らの活動を初めから  
フォーカスしてくれて、市の広報誌で相当何回  
にも渡って取り上げてくれました。それがテレ  
ビにつながったりとか、この過疎地域の表彰に  
関しても宇城市が推薦してくれたからこそ、こ  
ういう舞台があると思っています。そういう行  
政のバックアップってというのは、活動をスター  
トしたあとに、よりダイナミックに広げていく  
ためにほんとになくってはならないものだと思っ  
ていますので、皆さんもいろんなところでそう  
いう形をお願いしたいと思っています。

最後になります。私たちは、「悪だ」、「損だ」  
と言われてきたイノシシを「得だ」、「いいこと  
だ」って言われるようなマイナスからプラスに  
していきたいなと思っています。そのとき、い  
つも心がけている言葉は、「シンク・グローバ  
リー、アクト・ローカリー (Think Globally、

Act Locally)」です。

以上で発表終わります。ありがとうございます。

宮口／どうもありがとうございました。今、仲  
間は何人ぐらいいらっしゃるんですか？

宮川／今、県内に130人ぐらいいます。

宮口／大体、宇城市の人なんですか？

宮川／いいえ、県内各地にいて、地域のリーダー  
として頑張っています。

宮口／堆肥にする機械は初めて見ましたが、あ  
れはいつ頃からあるんですか？

宮川／2年半前から導入をしており、全国から  
多くの方が視察にいらっしゃるので、その際に、  
持続的にしていくためには、ジビエの出口より  
も、こっちの出口のほうがいいっていうことを  
言い続けています。

宮口／分かりました。大変興味深い写真も多く  
て楽しかったです。どうもありがとうございました。

宮川／ありがとうございました。

宮口／これで5つの団体の事例発表を終わらせ  
ていただきます。このあと、意見交換を行います。

意見交換

宮口／大変興味深い発表、ありがとうございました。それでは、本日ご発表いただきました優良事例表彰団体の皆さまとの意見交換のお時間に入らせていただきます。

会場の方で聞いておられて、「この辺り、質問してみたい」とか、そういうようなことがあると思いますが、いかがでしょうか。

また、登壇されている発表者の中で、他の方の発表に対して、こういうことが気になったとか、そういうことがあったらお伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか？

都竹／最後の宮川さんの話が非常に印象的ですが、ごく興味深かったんですが、先ほど宮口先生もおっしゃいましたけど、堆肥化の話、実際、ジビエの処理っていうのはハードルが高くて、基準も厳しいので、何かいい方法はないかと思っていたんですが、どういう経緯で考えられて、どうやって開発をされたんでしょうか。

宮口／くまもと☆農家ハンターさんお願いします。

宮川／ありがとうございます。おっしゃるとおり、私たちが実際に捕獲したイノシシでジビエにできるのは1,000頭の中で、大体200頭ぐらいしかないんです。それくらいお肉にできる確率は少なく、残りを廃棄物として処理するっていうのが非常に難しかったんですけども、そういうときに、たまたま一度宮崎のメーカーさんが、「こういうのが使えないか」って持ってきてくださったことがあったのが、もっとあれより小さい機械でした。それは、半年使って断念しました。なぜかというと、死んでいるイノシシをさらに刻んで入れないといけなかったんです。それは常人ができることではなかったですし、米ぬかを半分入れないといけなかったっていうのが、米ぬかは餌にもなるようなものなので断念しました。私たちは声を上げ

るっていうのは、とにかく徹底してやっていることです。「こんなことをしたいんだ」、「こんな課題がクリアできないんだ」っていったときに、それを私はメルマガを書いていまして、そのメルマガを見た福岡の豚の処理をされているメーカーさんが、イノシシ用に改良できないかっていうお話をされて、そこと1年ぐらいかけて、ずっと改良して作ったのが、さっきのもんです。あれはまだ試作みたいなものだったんですけども、来年、それを本格導入、もうワンサイズ大きいものを導入して作ろうと思っています。大体250キロぐらいまでは5時間ぐらいで全部堆肥にできるので、すごいです。90キロぐらいのイノシシが、そのまま堆肥に生まれ変わるっていうのは、自分たちでも魔法だなと思います。とにかく固定費が掛からないので。どこの市町村でもやはり施設の運営が相当大変なんです、イノシシはいつかかるか分からないので。今日いらっしゃる皆さんに、楽しみにしていただきたいのは、今日朝一でイノシシさんが4頭捕まっています。皆さんをお待ちしておりますので、楽しみにしててください。ありがとうございます。

宮口／その辺りの経費というのは、今はどんな感じで出ているんですか？

宮川／私たちは会社を設立しておりますので、会社の中から負担をしています。

ただ、先ほどの新しい機械に関しては、1,500



万円くらいかかるというところがネックだったんですけども、休眠預金活用事業に採択していただいて、それで新しい機械を入れることができるようになったので非常にありがたい制度だなと思っています。

宮口／これから、その機械に関しては、農林水産省辺りがなんらかの支援の方策を出してくるかもしれません。ぜひ皆さんもそういうところに働きかけいただきたいと思います。積丹町は、いわゆる活動経費みたいなのは、どんなふうに出ているんですか？

水鳥／藻場づくりは、実は農林水産省の「水産多面的機能発揮対策事業」というものがあり、そこから活動経費が出ています。

宮口／グループとしてお金を集めたり、そういう必要はないんですか？

水鳥／はい。

宮口／「100プロ」はどうでしょうか？経費はどの程度かかるんでしょうか？

大内／経費は、イベントの参加費でまかっています。カレンダー写真展も、そのカレンダーを販売することによって、写真を現像したりしています。その他、エコマーケットも、お気持ちをいただいて運営をしています。

宮口／分かりました。ありがとうございます。

それから、活動を継続するためには、仲間を増やしていくというようなことも難しいと思いますが、その辺りについて積丹町の方はどんな感じなんですか？

水鳥／この会を始めた頃はウニ除去にレジャーで来られるダイバーたちにご協力をいただいた時期もあったんですけども、それも続けてい

くうちに先細りになって、なかなか皆さんのスケジュールも合わなくて実施できる回数も少なくなってきたので、やはり地元にいる漁業者で、仲間内でいつでも集まれるというグループで活動を続けています。平成17年から始めておりますので、これまで長く続けてられたのは、やっぱり気の合う仲間がやれたということが最大だと思います。

宮口／「くまもと☆農家ハンター」は、仲間づくりの苦労話はありますか？

宮川／私たちは、活動がぶれずに「地域と畑は自分たちで守る」、この1つで来られたというのは、言葉を最初に生んだからだと思っています。「地域と畑は自分たちで守る」という夢、これに該当するのは農家しかいないんです。地域を守るだけだったら、他の人、例えば他の産業の人も入れますけども、やはりその大義っていうのは、すごく大事だと思っていましたので、理念を初めに作ったっていうのは良かったかなと思っています。

後は、仲間を作るときに、あまりハードルを上げ過ぎなかったっていうのが良かったと思っています。勉強して、地域の人に伝えてくれるだけでも農家ハンターのメンバーよってっていうような参画しやすい仕組みを作ってきたっていうのは良かったなと思っています。

宮口／最初は、数人から始まったと思うんですが、それはどういう方々ですか？

宮川／私は、熊本県が主催した「くまもと農業経営塾」という若手の勉強会があって、その参加者全員に連絡して「イノシシ困ってない？」という話をしたら、たくさんの方が手を挙げて、一晩イノシシ合宿っていうのを開催して、座を組んで語り合ったっていうのが2016年4月10日で、地震のちょうど4日前でした。そういう仲間ができたので、地震のときも、農家として

みんな率先して対策っていうか、物資を供給したりとかできたっていうのは、やはり基盤を固める上でもすごく良かったなと思っています。今私たちは、それをこの川上から川下までの対策を市町村に向けて担い手育成支援っていう形で販売して、その収益で、先ほどのイノPっていうのは回しています。

宮口／みなさん、狩猟免許を持っている方なんですか？

宮川／いえ、必須にはしていません。持っていないメンバーもいます。

宮口／それは構わないんですか？

宮川／守るだけでも立派な鳥獣対策ですし、追いかけても対策だと思っています。

宮口／柵なども、どんどん立派になってきたんですか？

宮川／バージョンアップしています。私たちもとにかく対策者目線で、普通の例えば金網柵みたいなのは、下から潜られるんです。だから、潜られないようにスカートみたいなものを付けたりとか、箱穴に関しても毎日見回りが必要だったものを、ICTと連動させることによって、見回りの負担を減らしたりという形で、農業をしながら対策はできるというのを実現させるためにいろんなものを使ってきたという感じなんです。

宮口／どうもありがとうございました。根羽村の大久保村長さんに伺いますが、私の印象では、人が人を呼んでいるような村という感じもしたんですが、その辺りは、村長として村の運営方針の中で、どんな形で展開してきたのか、ご説明いただけますか？

大久保／ありがとうございます。私ども小さな村ですので、小さな行政というのは、非常に回転しやすいというのが一番の特徴で、1つの方向でやろうというときは、うんと早くスタートしていきながら、方向修正も非常に早くできる、さらに、そこにいろんな多様な意見が必要になってくるし、行政ですが、民間感覚が必要になってくるということもありますので、やはり地域おこし起業人の方が入って、そこから情報が出て、また新しい人が来たり、逆にさまざまな民間も通しているいろんな人のつながりができたりして、行政なんですけど、民間と一緒にやって民間感覚で地域づくりができるっていうのが小さな行政体の魅力だと思いますし、それをフルに使っていきたいと思い、村づくりをしています。

宮口／行政と村人が非常にフラットな関係にあると伺いますか、役場職員に対してはどのような育成をされていますか。

大久保／役場職員も非常に人数が少ないです。多能工型職員を目指そうと今の職員にも呼びかけておりますけども、やはりそれはいろんなことに関わっていく、1人の職員が専門的になるのは非常に難しいので、いくつも兼業しながらやっつけていこうじゃないかという取組みで、それでもやはり自分たちを変えていく仕組みというのも必要になりますので、外部人材による講師を入れたり、逆に職員といろんな人たちが一緒になって研修をする場を作って、それを繰り返し、繰り返しやっていくような形になります。それをやっていると、職員自身がスキルアップというか、磨かれて次へ進んで行くという形で、多能工型職員を目指すことができるかなというのを改めて思っています。

宮口／ありがとうございます。過疎地域というのは、人が少ないわけですから、分業体制ということ自体ができないことが基本だと、私は昔からいっています。ですから、やはり多くのこ

とができる人を育てる、小さな村役場なんかは、1つのことを丸ごとなんでも請け負う会社のようなものだというセンスで運営してほしいなというようにもいってきました。根羽村は、そのような方向で取組んでおられると、大変心強く受け止めました。

会場から何かご質問とか、ご意見ありませんか？

A／村長さん、市長さんにお尋ねしますが、空き家対策について行政が関わっておられるのか、教えてください。

宮口／それでは、大久保村長からお願いします。

大久保／空き家というのは非常に大きな問題で、私ども、それをなんとか活用したいと思っているんですけど、現実的にはなかなか利用するのが難しい状況にあります。今、空き家バンクといいますか、村のほうで所有者の方の情報を集約して、希望する方をご紹介しますというような取組みもしていますが、なかなか空き家を使って定住というか、人口を増やしていくのは非常に難しいという思いをもちています。私ども、そのような取組みをしていますが、なかなか解決策ないのが現状です。

宮口／都竹市長お願いします。

都竹／私ども飛騨市では、「住むとこネット」という空き家バンク、登録制度を作っていて、固定資産税の納税通知を出すときに、「住むとこネット」に登録を、という呼びかけもしながらやっているんですが、かなり動くなという印象は持っています。ただ、だからといって空き家問題が解決するということは決してなくて、いい空き家がしっかり流通するということの部分なんで、空き家総数自体は増えていますが、その意味では根本的な解決になるってことは決してありません。ただ、今年空き家の取り壊しの補助をようやく始めて、後発でもあるって

うこともあって2分の1、上限100万っていうところで始めたんですが、申し込み件数が100件くらい来ているんです。それで空き家の取り壊し需要ってというのがこんなにあったのかっていうことを改めて気付かせてもらいました。

ですので、空き家はやっぱり使えるものは使っていくっていうところと、取り壊してもらうものは、やっぱり取り壊しを進めていくってことは考えていかざるを得ないし、考えたほうがいいと思います。それから、さらに空き家でどうしても危険な空き家っていうのがいくつか出てきます。飛騨市は、雪が深いので空き家が破損していく原因っていうのは雪が結構大きなウエイトを占めるものですから、今回9月の議会でそうした空き家に対して市が例えば、危険回避の措置がとれるような条例を作って、緊急の例えば雪下ろしをやるとか、そうしたことも対応としては考えています。

あともう1つは空き家を賃貸で借りる、空き家を直接売買すると権利関係などの問題が結構大変なんです。なので、不動産業者が回収して賃貸に出すというところに対する補助っていうのは別に設けていて、これもやっぱり一定の利用があります。なので、空き家は、いいものの流通、賃貸、取り壊し、あるいは、それでも残るものは危険回避、いろんな切り口があるので、かなり総合的な行政をしていかないといけない項目かなと思っています。

宮口／ありがとうございました。

A／重ねて申し訳ございません。まだ使えるような空き家に対してリノベーション、あるいはリフォーム等々をする場合、行政から補助などを行ったりということはされているんですか？

宮口／大久保村長お願いします。

大久保／私ども根羽村では、そういう制度が必要だという話はあるんですが、実際まだ始めては

いないです。ただ、空き家を使って、さっきも言ったんですけど、それで全てが定住人口につながるという考えはもう別の次元で考えないといけないのかなというのを感じております。ただ、今言われたように空き家に対するさまざまな政策といいますか、行政的な支援は必要だと思っておりますので、これから考えていきたいと思っています。

都竹／私どもは、もちろんリフォームの助成はあるんですが、どちらかというと、市民が自分の家をリフォームする助成なので、空き家を先ほど言った貸し出すところに対する補助と、それから空き家を取得した人、移住してこられたりして住所を移して購入するところへの補助っていうのは、設けています。それをリフォームに使う、修繕に使うということになるかと思っています。

宮口／住む人あつての補助だと思います。よろしく申し上げます。時間もなくなって参りました。最後に、地域の自慢をひと言ずつ申し上げます。それでは、積丹から申し上げます。

水鳥／今、海の中で磯焼け現象っていうのが起きておまして、これが日本だけではなくて全世界に広がっております。その中でこのようにウニ殻を使って、循環型の再生産が可能になったこと、これによって磯焼けの対策の1つの手立てになると思います。ぜひ、磯焼けで悩んでいる方が、地域がありましたら、どうぞお問合せいただければ私もアドバイスさせていただきます。よろしく願いいたします。

宮口／それでは大久保村長申し上げます。

大久保／私ども、やはり森林、森が資源ですので、それをベースにそこで人が生き生きと住み続けられる村づくり、これをぜひこれからも継続していきたいと思っています。

宮口／今、かなり実現しておられると思います。じゃあ、都竹市長申し上げます。

都竹／自慢の宝庫であることが自慢かなと思っております。もうどこから、どうしても、どれだけでも出てくるという感じです。私も市長になって7年目なんですけども、今でも、まだこんなに地域資源があるかっていうくらいネタが出てくる。先ほどのように困りごとすら地域資源にできる人もいるっていうことですね。自慢の宝庫であることが自慢かなと思っております。

宮口／どうもありがとうございます。それでは、「100プロ」さん申し上げます。

大内／私たち「100プロ」は、やはり仲間づくりだと思っています。この地域に移住してきた方々が寂しい思いをしない、地域に早く溶け込むことができる、そんな仲間がメンバーにいます。そういった人であったり、仲間が僕たちの自慢です。

宮口／それでは、「くまもと☆農家ハンター」さん申し上げます。

宮川／ありがとうございます。私たちには獣がいる、獣と農業があつて、活動拠点であるこの戸馳島っていうところを「獣×農×島(ケモノノシマ)」って呼んで、これからモノじゃなくて、コトを全国の皆さん、世界の皆さんに紹介できるようなジビエツーリズムっていうのをやっていきたいと思っています。それが地域の自慢にできるように頑張っていきたいと思っています。

宮口／どうもありがとうございました。すでに時間が過ぎております。今日の5つの発表は極めて内容が多彩であり、傾向とか、そういうようなことはございません。ですから、まとめて総評をとというのは、控えさせていただきます。

おさらいだけ申し上げます。積丹町では、海

のウニの育成ということに成功されています。これは地場産業としても素晴らしいし、環境問題としても素晴らしい。

それから根羽村は小さな村で、ほんとに森をベースにした暮らし方というものを確立しておられます。素晴らしいと思います。

飛騨市は、市長が最後におっしゃったように資源がいくらでも出てくる、それは資源を見つける力、それをアピールする力というものが地域にあるからだと思います。

「100プロ」も小さいけれども、非常に楽しく素晴らしい活動でした。

それから農家ハンターさん、農家が畑を守るということで、ジビエにまで行きついておられる。

過疎地域だから人が少なくて大変だ、というのではなくて、今住んでいる人が、目の前にあることをうまく扱うことができれば、それは都市に勝る地域になる、ということをお肝に銘じていただきたいと思います。

今回もそういう事例の発表があったということでございます。それでは、拙い司会でしたが、これで終わらせていただきたいと思います。長時間、ありがとうございました。



